

宮のうけさせ給はぬ事にて候ぞといひけり、すなはち驚ぬ、又ねたりける夢に、同じやうにみてけり、おそれおのゝきて、次日の朝院に参じて、前大納言邦綱、別當時忠卿などにかたりてけり、太政入道清盛、つたへきかれたれども、いと承引なかりけり、さるほどに同人の夢に、還御ありと、邦綱卿長絹の狩衣きて、新院の御ともにさぶらふ、頭亮重衡朝臣よろひをきて御供に候とみてさめぬ、去ながら一日の夢もちるられねば、申出されざりけり、十一月廿六日、平の京に還御有ければ、かの夢にはよらざりけり、山僧のうたへ、又東國のみだれなどのゆゑとぞ聞え侍ける。

○按ズルニ、還舊都ノ事ハ、宜シク僉議條ヲ參看スベシ、

興廢

〔萬葉集雜歌〕過近江荒都。○天時柿本朝臣人麻呂作歌

玉手次敵火之山乃略○中石走淡海國乃樂浪乃大津宮爾天下所知食兼天皇之神之御言能大宮者此間等雖聞大殿者此間等雖云春草之茂生有霞立春日之霧流百磯城之大宮處見者悲毛歌○反

高市古人感傷近江舊堵作歌或書云高市連黒人

古人爾和禮有哉樂波乃故京乎見者悲寸

〔萬葉集雜歌〕高市連黒人近江舊都歌一首

如是故爾不見跡云物乎樂波乃舊都乎令見乍本名

〔千載和歌集〕古鄉花といへる心をよみ侍る

讀人不知

さ、なみや亥がの都はあれにしをむかしながらの山ざくらかな
〔萬葉集六歌〕春日悲傷三香原荒墟作歌一首并短歌